地域産業委員会　行政視察報告書

１　日程

令和６年８月 20 日（火）～22 日（木）

２　視察先及び視察項目

	視察先	視察項目
1	奄美市	中心市街地活性化事業　－観光客の消費行動拡大に向けた商店街の取り組みについて
2	特定非営利活動法人 奄美青少年支援センター「ゆずり葉の郷」	ゆずり葉の郷　奄美青少年支援センターについて
3	鹿児島市	鹿児島市立美術館について

３　視察委員

○ 委員長　　田　村　英　樹　大田区議会公明党
○ 副委員長　大　森　昭　彦　自由民主党大田区議団・無所属の会
○ 委　員　　湯　本　良太郎　自由民主党大田区議団・無所属の会
　　柿　島　耕　平　自由民主党大田区議団・無所属の会
　　大　橋　たけし　大田区議会公明党
　　あまの　雄　太　大田区議会公明党
　　村　石　真依子　日本共産党大田区議団
　　宮　﨑　かずま　日本維新の会大田区議団
　　伊　藤　つばさ　つばさ大田区議団
　　とく山　れいこ　東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会）

４　視察報告

項目ごとに各会派の視察報告を記載。

（１）奄美市

◆視察項目

中心市街地活性化事業　－観光客の消費行動拡大に向けた商店街の取り組みについて

（自由民主党大田区議団・無所属の会）

奄美市役所にて職員の方から「中心市街地活性化事業」また「観光客の消費行動拡大に向けた商店街の取り組み」についての説明を受けた。奄美市のある奄美大島は鹿児島県に属し、鹿児島市の南西約380キロメートル、沖縄本島から約300キロメートルに位置している。奄美大島全体で人口約６万人、日本で３番目に大きな島となる。奄美市の人口は約４万人で、奄美大島の人口の約７割を占める。世界自然遺産にも登録されており、特産品として大島紬や、黒糖を用いた加工品がある。その立地や環境から、観光客の誘致には特に力を入れており、「奄美群島遊脚・周遊促進事業」「奄美満喫ツアー助成事業」「クルーズ船受入体制強化事業」等、奄美大島への誘客を図り、団体旅行・個人旅行の来島を促すため、旅行会社や学校、イベント、個人観光客への助成や、航空・航路事業者と連携したプロモーション等を行っている。

また、人口減少や少子・高齢化のなか、中心市街地をより住みよいまちにするための「なぜまちまーじんゆらおう計画」というものを2023年に策定している。この計画は、商店街や市役所、商工会議所、まちづくり会社、民間事業者の有志からなる「なぜまちまーじんゆらおう計画策定委員会」での検討をもとに策定したもので、計画に掲げた90項目のプロジェクトを、官民連携の体制で実施し、地域課題の解決に取り組んでいるとのことである。90の目標の中には行政だけではなく、商店街やまちづくり会社が主導で進めることを想定している目標も多くあり、民間の地域事業者がまちづくりや産業振興に対してとても積極的に取り組んでいることが分かった。このように、大田区においても地域事業者との連携を密に行い、しっかりと意見を取り入れ、また事業者自身にも動いてもらう関係性を作り、地域振興、産業振興を進めていく必要があると考える。

（大田区議会公明党）

奄美大島の中心市街地活性化の取り組みについてお話をお伺い致しました。奄美市は平成 11 年度に名護市中心市街地活性化基本計画を策定され、中央通りアーケードの改修やイベントの開催、平成 18 年度に法律改正に伴い計画の見直

しを行い、奄美市中心市街地活性化協議会の設立、（株）まちづくり奄美の設立、ＡｉＡｉひろばの整備、空き店舗対策等の実施に取り組まれ、平成 29 年３月に奄美市中心市街地基本計画を策定され、市民交流センター整備・中心市街地出店支援事業・スーパーの誘致・集客イベントの開催など取り組まれ、中心市街地営業店舗数は 247 店舗（Ｈ７年度）から 277 店舗（Ｒ５年度末）、宿泊者数は約 14 万人（H27 年度）から約 19 万人（Ｒ４年度）と増加、また大型船の受け入れ事業を行い送迎バスの運行、歓迎イベントの開催など取り組んで来られました。

この間、新型コロナウイルスの影響で令和２年から入込客数が大幅に減少しましたが、令和５年には９割まで回復をされており、インバウンドの受け入れ体制の充実に向けて市内宿泊施設、観光施設、飲食施設等における外国語表記やＷｉ―Ｆｉ等の整備への費用の一部助成、奄美群島において生産された農林水産物などの地域資源を活用した加工品の販路拡大に係る経費の補助など積極的に取り組まれておりました。そして令和５年４月から令和 10 年３月までの計画で「赤ちゃんからお年寄りまで、健康な方も障がいをお持ちの方も、子育て世帯も、みんなのんびり過ごせるまちをつくる」ことを目指し、市役所・商工会議所・まちづくり会社・事業者等有志で「なぜまちまーじんゆらおう計画策定委員会」を立ち上げ官民連携体制で、優しさ溢れるまちに向けて取り組まれており、魅力あるまちづくりについて勉強することが出来ました。この度の視察を活かし、さらに魅力ある大田区を目指して取り組んでまいりたいと思います。

（日本共産党大田区議団）

奄美市は現在人口約４万人だが、2040 年には 70 歳以上が４割になり、19 歳以下の若者が１割強しかいないアンバランスな時代になると予測されている。

島に暮らしている様々な人々を繋ぎ、その生活を支えるために「まーじんゆらおう（一緒に集まろう）計画策定委員会」を立ち上げた。自助、互助、公助に加えて共助を実現させるために、中心市街地の全世帯を対象としたアンケートを集め、そこから出された意見をもとに 90 のプロジェクト案を策定。その計画を実行するための「まーじんゆらおう計画実行委員会」は、商工会議所、商店街、行政、まちづくり会社、民間事業者などが参加した官民連携の体制で推進、事業は「宝くじ助成金」で賄う。各実行委員会で具体化し、プレイヤーを中心に実現させていく。2023 年から５年間かけて実施する予定。

誰一人として取り残さない地域を作るために、様々な住民の意見を集め、それをもとに 90 ものプロジェクトを作成するという方法は、大変興味深い。大企業を誘致するのではなく、地元住民らを主体に作っていったというところも学ぶべきところだと思う。

（日本維新の会大田区議団）

奄美市役所にて奄美市の概要・商店街活性化事業についてご説明頂いた。人口 40,255 人（令和６年３月 31 日時点）の奄美市は、奄美大島として世界遺産に登録されており、自然豊かで唯一無二の生態系を持つ島であった。奄美市役所は木材を多く利用した温もりのある市役所であり、カフェやキッズスペースが併設されるなど、まさに“訪れたくなる“市役所であった。また、各窓口の待ち人数がパネルに表示される他、「税金のこと」「子育てのこと」などシンプルに窓口が設定されており、まさに“分かりやすさ“も兼ね備えた市役所であった。さて、商店街活性化事業については、行政主導型から地域主導型に変更したことで、商店街や地域住民が自ら活性化を考える雰囲気となり、今では県外から若者が商店街に出店することも増えたという。確かに商店街を歩くと、若者視点のファッショナブルな店舗も多く、まさに楽しめる商店街となっていた。商店街の活性化が重要課題である本区でも、外から人を呼び込める計画戦略が必要だと感じた。

（つばさ大田区議団）

奄美大島は令和３年に世界自然遺産に認定されるほど豊かな生態系を形成しており、国内で５番目に大きな島である。ＬＣＣやクルーズ船の影響もあり観光客は増加傾向にあるが、2,000 人規模の大型船が寄港した際にはレンタカーや観光バスなどが十分に供給できないなど課題がある。また若い世代が減少し、人同士が交流する機会も減っていることから、中心市街地の活性化についての取り組みを行っている。

大型船への対応については、中心市街地への送迎バスを運行し歓迎イベント（大島紬の着付け体験や織体験など）を実施する。また大型船が寄港する際には、どれだけのタクシーや観光バスを手配できるかを事前に伝え、船の規模が大きすぎる場合は寄港を断る場合もあるとのこと。

近年は特に通販サイトが普及し、商店街における買い物機能が低下していた。2023 年に制定された「なぜまちま～じんゆらおう計画」は中心市街の名瀬へ一緒に集まろう！という意味が込められている。赤ちゃんからお年寄りまで、また障害のある方も、みんなが好きでいられる街を目指し、90 にも及ぶプロジェクトが計画されている。各プロジェクトには想定されるプレイヤーとして「市役所」「商店街」「まちづくり会社」「その他の担い手」のいずれかが設定されており、すべて行政任せにするのではなく、各団体に主体性を持たせている点が良かった。また集客拠点としてスーパーの誘致をするために、家賃の補助も行っている。小規模の食品店などから反発はなく、むしろ商店街側からの要望だったのは意外だった。

実際に商店街を歩いてみると、平日の日中は人通りが少ないものの若者向けのカ

フェバーや大島紬を扱う店、ハブの専門店など魅力的な商店街であったように感じた。大田区においても、消費するための商店街から新たな付加価値が必要なのかもしれない。

（東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会））

奄美市における中心市街地活性化事業についてお話をお伺いしてまいりました。奄美市の住民は 40,402 人と大田区においては一出張所単位ほどの大きさのまちになります。今回、基本に立ち返り、地域活性化の原点に立ち返る意味での視察をさせていただきました。

奄美市では、平成 11 年度から中心地である名瀬市中心市街地活性化基本計画の策定を行い、「賑わいに満ちた活力ある中心市街地の形成」を行ってまいりました。

目標を達成するための主な事業として、

1　中心市街地出展支援事業
2　商業集客拠点施設整備事業（スーパーの誘致）
3　各種集客イベントの開催
4　市民交流センター整備事業

の４つを柱に進めた結果、2015 年に 247 店舗だったが、2023 年度末には 277 店舗にまで増加しました。

実際、商店街を歩いてみたところ、とてもおしゃれなカフェがたくさんあったため、その中の一店舗にお話を伺いました。

オーナーの方たちは、もともと東京に住まれていたが、奄美市内にコーヒーのチェーン店がないこと、また、奄美市ではコーヒー豆の栽培をしていることから、いつかはコーヒー豆を自分たちで作るという可能性に魅力を感じ、移住してきたとのことでした。昨年までは、実店舗はなく、コーヒートラックでの販売形式だったのとのことですが、奄美市には朝から晩まで気軽にふらっと立ち寄ってコーヒーを飲める場所がない、とのことで、今年から実店舗を始めたそうです。

お話をお伺いしていて思ったことは、人を呼び込む魅力のひとつは、自分たちで作り上げられる「自由さ」ではないかと思いました。もちろん、店舗料に対しての補助が出る部分も大きいとは思うが、成功しても失敗してもいいよ、という自由さが人を動かす魅力のひとつとなっているのではないかと考えました。自由に産業を興していける環境を作り、必要があれば手助けすることでまちの発展に寄与していけるのではないかと思いました。

（２）特定非営利活動法人 奄美青少年支援センター「ゆずり葉の郷」

◆視察項目

ゆずり葉の郷　奄美青少年支援センターについて

（自由民主党大田区議団・無所属の会）

８月20日から22日の３日間の日程で、鹿児島市及び奄美市の訪問視察を行った。21日の二日目に奄美市名瀬地区の奄美青少年支援センター「ゆずり葉の郷」の訪問を行った。先ず、センター内の概要を説明頂いた。

その後、三浦所長より奄美での生い立ちや、幼少時代の暮らし、空手道との出会いにより、多感な青少年期を苦労しながら過ごし、その過程の中で自らも非行に奔った経験を持っていたこと、非行からの立ち直りで消防士となり、家庭の生計の手助けをする一方で、島内や街中の不良グループの更生に尽力をするようになり、当時を振り返っての話が続いた。極端な話題では、島内で勢力を持っていた反社会勢力組織とも渡り合い、島内の治安を完全回復するに至ったそうで「奄美の奇跡」と称賛されたそうだ。現在まで、保護司としての活動に力を尽くされ今日に至っておられ、その活動は、九州鹿児島に留まらず、全国に功績として称えられている。

今回は、東京に存在している県人会「東京奄美会」とのご縁で三浦氏をご紹介いただき、青少年や地域の中の健全育成について学ぶため、奄美大島名瀬地区に所在する「ゆずり葉の郷」を視察訪問させて頂き、青少年を更生させ、また、身寄りのない若者の世話をし続けている三浦所長の生きざまを勉強させて頂いた。警察も手を焼き、なかなか不良集団の更生にこぎ着けないでいる地域を、社会の正義を、道徳を指導する中で、元不良グループによる自警団組織を形成させた上で、地域パトロールをさせ、その若者たちによる注意喚起を励行させる行動が、いつの間にやら平穏な社会を作らせたという。中途半端な信念での活動ではない三浦氏の生き方に、委員会メンバーが皆、驚いた様子で感心させられた。

青少年との向き合い方、その取り組み方には大きな収穫を得た視察であった。ご多忙の中、訪問団の送迎など、大変なお世話を頂き心から感謝と御礼を申し上げる次第である。

（大田区議会公明党）

ＮＰＯ法人奄美青少年支援センター「ゆずり葉の郷」は、保護司である三浦一広氏が平成 11 年にＮＰＯ法人の認可を受けた団体であり、非行・不登校・家庭内の様々な課題を抱える青少年の相談・支援を行っております。三浦氏は団体設立の以前より奄美にある拳法の師範をする傍ら、昭和 50 年代から非行問題で補導されるような青少年に関わる活動を始められました。その１つが非行や暴

力には染まってしまった青少年に声をかけ、市内の治安維持や海岸の清掃活動を行う「青年警護隊」の結成・活動で、青少年の自尊心を高め、自立と更生に善導することに取組まれてきました。

その活動を続けていかれる中でＮＰＯ法人となり、奄美市の特命職員として青少年育成を担当されてきました。現在は自費で４階建ての自宅をつくり、拳法道場と青少年の一時預かり施設も用意されております。このような活動は広く知られ、多くの評価も受けられております。

2015 年法務大臣表彰（更生保護功労顕彰）2019 年鹿児島県知事賞

2021 年毎日新聞社会福祉顕彰受賞

毎年、鹿児島地裁の司法研修生に対して講義を行っている他、人材育成という観点から様々な企業の経営陣も訪れているそうです。

「ゆずり葉の郷」には現在でも青少年問題の相談が絶えず、特に近年では不登校と引きこもりの相談が多いとのことです。時代の変遷と共に青少年の課題が変わってきていますが、三浦氏は「こどもはすべて、より善く生まれ変わる！」の信念とこどもたちを「許す、認める、褒める、励ます、感謝する」ことをモットーに悩めるこどもたちの心に寄り添い続けております。

本区においても不登校や引きこもりは課題となっており、相談支援や居場所支援、就職支援に取組んでおります。この度の「ゆずり葉の郷」の視察は大変に参考となるものでした。青少年やこどもたちの心に寄り添った支援が本区でも実現できるよう取組みを推進してまいります。

（日本共産党大田区議団）

奄美大島は 1998 年不登校児の数が人口比でワースト１になった。さらに 2001 年名瀬市の非行犯罪認知件数は鹿児島県下ワースト１になった。学校崩壊、少年非行は日常茶飯事、闇の世界では、反社会組織が幅を利かせていたという。

三浦一広さんは、そんな奄美大島で生まれ育ち、青少年指導の道に入り、現在の「ゆずり葉の郷」をつくり、一方で合気道の師範としてこどもたちに関わってきた。これまでに３万人以上の子どもたちを更生させてきたそうだ。

「ゆずり葉の郷」は、非行やいじめ、虐待、育児放棄など様々な事情で学校や家庭にいられなくなった少年たちに居場所を提供してきた。教育機関とも連携し、ゆずり葉の郷に通えば、学校に出席したとみなされる。中学校や高校に通えないこどもたちが月に延べ 400 人近く訪れる。道場の隣には、義務教育を終えた未成年が暮らす「さざなみの家・奄美」がある。児童福祉法に基づき県内で初めて設置された。定員６人だったが９人に増えている。入所者は月２万円を払い、日中はアルバイト、夜は定時制の高校に通うなどして自立を目指している。

三浦さんの話によると、非行が変わってきていて発達障がいが増えているそうだ。また、成績が悪かったら認められないで落ちていくという今の学校に対する危機感も持っている。

「どんな子でも、その子を受容して伴走してくれる、支えてくれる人が一人でもいれば立ち直れる」という子ども観をもったおとなを学校や施設に増やしていくことが、こどもたちを救うために大事なことだと思う。

（日本維新の会大田区議団）

ＮＰＯ法人奄美青少年支援センターゆずり葉の郷（奄美合気挙法連盟本部道場）所長の三浦一広氏よりお話を伺った。

同施設では、非行や不登校、恵まれない家庭環境をもつ児童生徒に対して、相談・武道・共同生活等を通じた自立・共生を目指す支援活動を行い、青少年の健全育成に取り組んでいる。

ロコミを中心に本施設の実績が広まり、奄美市中から前述したようなこども達が集まってきた結果、一昔前と比較して奄美の青少年問題は大きく改善したという。今では、鹿児島県警本部長が代われば必ず本部長が三浦氏のもとに挨拶に訪れるという信頼ぶりである。

特に引きこもり問題については、専門家も対応できなかった（改善しなかった）こども達に対して、聞き出す力／力で対応しない（硬ではなく柔）等を徹底し、学校への復帰に大きな成果をあげている。本区でもフラットおおたでは若者サポートを行なっており、今回の視察でのノウハウを共有し、基礎自治体ゆえに行えるきめ細かなサービスに繋げていく。

（つばさ大田区議団）

当支援センター所長の三浦一広氏は奄美市出身でプロ空手選手。2000 年より青少年育成支援センター「ゆずり葉の郷」を設立し、保護司として非行少年を更生する活動を行っている。青少年との向き合い方は、上から目線で注意するのではなく、寄り添って話を聞き、心から対話すること。そして、お腹いっぱいになるまでご飯を食べさせる。ご飯をまともに食べられていない非行少年も多く、精神状態を安定させるためには、まずバランスの良い食事で空腹を満たすことが重要である。

施設にやってくるこども達は親からの虐待やネグレクトなど愛情不足により、心の拠り所がない状態である。だからこそ、三浦氏はどんなこどもでも認めて、相手を信じて、自己肯定感を高めるために褒めて励ます。全身全霊で自分を守ってくれる人がいると分かって、はじめて安心し立ち直り、前に進むことができるとのこと。

近年は非行少年が減っているものの、不登校や引きこもりが激増している。三浦氏のこれまでの経験談を伺い、こども達への関わりにおいて必要な要素が欠落しているのではないかと改めて実感した。特に東京においては共働き世帯の比率が高く、義務教育からの受験率も高い。仕事と子育てを両立する中では、親は日々忙しくなりこどもと接する時間は減ってしまう。また親は愛情を持って接しているつもりでも、「いい大学に行って、いい企業に就職してほしい」と期待されることに対し、耐えられないこどもが増えているのではないかと思う。こどもの能力を信じることは必要だが、本人はそれを望んでいないのにもかかわらず、幸せの定義や価値観まで親が無意識のうちに強要してしまっているのではないかと感じた。引き続きこどもの健全な育成に関して、社会のあるべき姿を考えていきたい。

（東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会））

ゆずり葉の郷とは、青少年の健全育成を目的に設立され、特定非営利活動法人として認可された団体です。奄美青少年支援センターであり、男子寮が一つ、女子寮が二つの計３つの寮があります。ご家庭で過ごすことが困難なこどもたちが、寝食を共にしながら、学校へ通ったりアルバイトをしながら更生していくそうです。警察や児童相談所でも解決ができない難しい問題を抱えたこどもたちもここ、ゆずり葉の郷にくると、不思議と解決するそうです。2001 年ごろ、奄美大島では、青少年問題が深刻化しており、不登校、非行犯罪、自殺が全国ワースト上位だったそうです。市長から依頼を受け、センター長である三浦一広氏は、パトロールと少年たちへの声かけをはじめたそうです。そのうち、少年たちとの関係をつくることができた三浦氏は、少年たち自身に町の治安維持回復を依頼、少年警護隊を誕生させました。もともと非行少年だった彼らに対する風当たりは強く、防犯関係者からも大きな反対が起きたそうです。しかし、三浦氏は【彼らを信じていました】。そして、少年警護隊が発足してから数年後、犯罪認知件数は半分以下となり、少年非行は１／３まで減少し、治安が劇的に回復したそうです。非行少年と呼ばれていた彼らは、「社会から許されない人」「人として認められない人」「褒められない人」「励まされない人」「感謝されない人」でした。しかし三浦氏が彼らに接する際、笑顔で「許し、認め、褒め、励まし、感謝」したそうです。最近では、非行少年よりも不登校、そしてひきこもりのこどもたちが非常に多く、また、非行少年が抱える問題よりもより解決が難しいと三浦氏はおっしゃいました。不登校・ひきこもりの問題は奄美市だけでの問題ではなく、大田区においても数多くあります。今回の視察は「原点に帰り、問題解決の糸口を探す」ことが目的でしたが、その希望となる出会いとなりました。

（３）鹿児島市

◆視察項目
鹿児島市立美術館について

（自由民主党大田区議団・無所属の会）

鹿児島市が運営する美術館として鹿児島市に因んだ展示に強くこだわっていたことが印象深かった。訪問した日は『黒田清輝とその時代』をテーマとした展示が行われていた。黒田清輝氏は鹿児島市で生まれ、後にフランスへ留学し油彩表現が高く評価され、日本の洋画界に新風を吹き込んだ画家であり1954年に開館した鹿児島市立美術館設立に大きな影響を与えた存在である。本年が鹿児島市立美術館開館70周年にあたり、記念して黒田清輝に関わるテーマの展示を行っていたが、鹿児島市で黒田氏に因む展示を行なう事に大きな意義があり、そこに人の関心が集まっていることは鹿児島市にとっても大きな公益を生んでいると感じた。その地域に深く縁があり、その縁が世界に繋がる、その中心に発信元の地域がある。大田区が美術・芸術の施策展開を図る際にはこの視点は大切にしないといけないと考える。いかに優れた美術品を収集展示しても、発信元との因果関係が全くなければ、人の心を打ち、関心を集める展開には繋がっていかないであろう。

質疑応答の際には美術館の運営費について質問をした。運営費は来館料では賄えないので赤字運営であるとの回答であった。美術館を訪れる方の市内での消費行動も含めた経済効果について質問をしたところ、そのような視点で美術館の効果を調べたことがないとの回答であった。市外来訪者からすると、とても価値の高いサービスを提供していても、提供元がそのサービスの中身について客観的に評価できていないと、市にもたらす公益の最大化の為に何をすべきか、どの程度の予算や人的資源の投入をすべきか判断が難しいと思える。我が区で美術品展示等のサービスを行う際は、その効果の把握について努力すべきと考える。

（大田区議会公明党）

鹿児島市美術館の基本方針には、「広く市民と手を結んだ開かれた美術館」といったコンセプトが示されており、開館時より多くの市民・来場者に楽しんでいただくことを第一に運営されていることが分かります。年間予算は約２億４千万円を計上しており、その歳入の多くは入館料（¥300)を充当しているが、来館者数の増加やその他の収入源を増加させることは、今後の施設保全・収蔵

品の管理、人件費など円滑な美術館運営を進めていくために必要との課題認識を伺いました。

この収入増に向けて、美術観賞に興味の無い方を取り込むためのイベントやランチコンサートなど音楽との融合、また美術館近くにある城山ホテル鹿児島をご利用のお客様の誘致などに取り組んでいるとのこと。こうした企画力のスキルアップや外部との連携は、大変重要であると思いました。

現在、鹿児島市美術館の収蔵品は約 4,500 点で、鑑賞用に展示している作品は概ね 140 点とのこと。これについても、多くの作品を鑑賞していただくために年５回の入れ替え作業を行い、企画などの見直しを行なっているそうです。

本区においても、区内施設に区収蔵品の展示を行っていく計画ですが、入館料を設定していない中で、来館者へのサービスや満足度の向上に資する取り組みをどのように行なっていくのかをしっかり整理し、効率的・効果的な空間づくりが必要と考えます。

大田区が収蔵する作品のうち展示できるものはごく一部となります。

このため、例えばデジタルアーカイブ化を併用することで、区内施設を訪れなくても鑑賞できる仕組み、タブレット端末を活用した教育環境での鑑賞の仕組みなど、収蔵品の活用について様々検討することも必要かと考えます。

今回の視察を通し、自治体経営による美術館運営の課題を学びました。今後の大田区における文化財事業に反映させていきます。

（日本共産党大田区議団）

鹿児島市立美術館は 1954 年９月に薩摩藩主島津氏の居城であった鶴丸城二の丸跡地に開館した。約 30 年間は歴史資料館としての性格をあわせ持つ美術館として、独自のコレクションを収集・展示し、地域の芸術文化の振興に寄与した。1985 年 10 月に新装開店し、郷土ゆかりの作家による美術作品と 19 世紀以降の西洋美術、桜島を描いた作品などを収集・保存・展示する美術館として、作品展の他に美術講座、講演会などの活動も行っている。

現在収蔵している作品は約 4,500 点、約 140 点が常設展示されている。作品の倉庫が４部屋あり、湿度、温度などを管理しながら数多くの作品を保存することができる工夫がされている。

鹿児島市は 60 万人都市だが、このように大きな美術館を持ち、年間の予算総額約 2 億 4,100 万円かけているところに、この施設を市として高く位置づけていることが分かる。

参加者はコロナ禍前は 15 万人、コロナ禍では８万人まで落ち込んだが、現在は 11 万人まで復活している。「美術に興味のない方をいかにして取り込むか」を課題にしているという。そのために、エントランスで音楽会を開いたり、他の美術館と連携して幅広い作品展を行ったりしている。また、絵画教室を行い、展示作品

を自由に鉛筆画で模写することができ、下敷きや鉛筆も貸し出している。視察当日は地下展示ロビーで「市民アート」の展示会を参加費無料で行っていた。まさに、多くの市民を美術館に呼び寄せ、美術への興味を高めていこうという姿勢が強く感じられた。

（日本維新の会大田区議団）

鹿児島市立美術館にて、館内案内とともに文化財活用ならびに美術館経営について、施設スタッフよりご説明頂いた。鹿児島県内唯一の文化財の公立美術館として、地域の芸術文化の振興に寄与してきた本施設は、保存されている文化財のうち１～２割を季節やイベントに合わせて展示しており、来場客に全ての美術品を満喫してもらえるよう意識されていた。また、美術館経営の全国的な問題として「来場者数の減少」が挙げられるが、本施設では、音楽×美術、ワイン×美術館などの工夫を凝らし、新たに美術・芸術・文化に興味を抱いてもらえる層の開拓に取り組んでいる。大田区でも本年６月に「大田区立馬込アートギャラリー条例」が議案として可決され、今後は区民から贈呈された文化財の保管・展示が広く進んでいく。両者の収益重視の度合いに違いはあれど、鹿児島市立美術館での工夫・ノウハウを区民の声・ニーズと組み合わせながら、今後の大田区内の文化施設運営に取り込んでいく。

（つばさ大田区議団）

区民からの寄贈アート作品等を所有する大田区として、鹿児島市立美術館での保管方法や文化振興に関する視察を行った。

本美術館は郷土作家や桜島を題材にした作品を中心に収蔵している。また、モネやピカソなど海外の作品収集も行なっており、見応えのある展示を行っている。本視察の際にはちょうど開館 70 周年、黒田清輝の没後 100 年を迎え、全国から黒田作品や関係作家の作品が集まる特別展が開催されていた。

他美術館からの貸出作品はガラスケース越しに展示され、来館者が触れられないようにされていたり、写真撮影可能なものとＮＧなものがあったりと、所蔵者の希望や著作権など必要に応じて対応していることがわかった。展示に関する課題としてはＬＥＤ化に対応できていないこと。ＬＥＤ化にすることで作品の経年劣化を軽減でき、照度を落としても自然光に近い明るさで鑑賞できる。ただし、ＬＥＤ化には１億円程度かかり、実現の目処は立っていない。美術館の予算は 2 億 4,100 万円で、コロナ禍以前と比較して来館者が減っていることもあり財政状況は厳しく、現在 300 円の入館料（大人）の値上げも検討されている。

展示されていない作品のバックヤードも案内いただいた。常設展では 150 点ほどの展示だが本美術館には約 4,500 点収蔵され、年に５回展示替えしている。倉庫は

壁・床・天井が杉材で覆われており、適切な温度・湿度で管理。自家発電設備も備え、万が一の停電時にも対応できると伺った。本区では今後、馬込アートギャラリーが区の所蔵作品を管理することになるため参考にしたい。

また東京の美術館では基本的に許されていないが、作品を見ながらの模写（鉛筆）も学生に限って許可しているとのことで、公立美術館として教育機能をきちんと果たしている。他にもワインを飲んだ後に作品を鑑賞できる少人数制のワークショップなど、魅力的なイベントを開催されている点も大変参考になった。

（東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会））

鹿児島市立美術館を視察。昭和 29 年に歴史資料館としての性質を併せ持つ美術館として開館後、昭和 60 年に地元関係作家を中心に 19 世紀末以降の西洋美術の作品を収集・保存・展示する美術館として新たに開館し、今年で 70 周年となられました。

館内は常設展のほかに「黒田清輝とその時代」として鹿児島市生まれの黒田清輝の没後 100 周年特別企画展が行われていました。全国に点在している黒田清輝の作品を一堂に見ることができ、大変見ごたえのある企画展でした。鹿児島県唯一の公立美術館として、毎年一点ずつコレクションを増やしているとおっしゃられておりましたが、その蓄積が活きていると感じられる展示物であるとともに、他美術館の作品とのコネクションの強さも感じられました。

鹿児島市立美術館の令和６年度予算は、２億 4,100 万円で、昨年度予算よりも増えているとのこと。入館料は一般で 300 円だが、入場料による採算性はない。また、絵画のため、年々劣化していくものを修繕する必要があり、修繕費も高いため、年間でひとつずつ修繕していくとのこと。しかしながら、鹿児島市内は日本画の修繕が可能な方はいるが、油絵の修繕可能な方は県外におり、輸送代もかかるため、修繕ひとつとっても絵画管理の難しさを感じました。

総じて、年間予算ひとつとっても莫大であり、この規模の予算を今後大田区内で美術館運営に費やし続けることができるのかという点、さらには、企画展などを行うにあたっての他美術館とのコネクションが可能な人材の確保も考えていく必要があります。

大田区でも馬込アートギャラリーの設置を検討しており、今後上記の課題をどのように向き合っていくか考えていく必要があると感じました。